ういるす×ういるす

にゃんきち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ういるす×ういるす

【Ｎコード】
Ｎ７８５４Ｉ

【作者名】
にゃんきち

【あらすじ】
春休み明け、登校日初日。いつもは全く起きられないのになぜか今日は目覚ましが鳴る前に起きてしまっている。寝ぼけダメ学生が早起きした日には何かが起きる？　日常から非日常へ、突如として不運な目に会い続ける主人公、謎のウイルスと少女。はたして平和な日常は戻ってくるのか？　ありきたりな日常を舞台に非日常と謎が錯綜する、そんな物語です。

第一話　日常×非日常（前書き）

この作品は別の投稿サイトで連載しているものです。せっかくなのでこちらにも投稿してみました、加筆修正はしたので少しは良くなっているはずです、はずなんですけどねぇ。精進します。

良かったら読んであげてください。そして感想なんかもいただけたらうれしいなぁぁぁぁぁぁぁぁ。よろしくお願いします。

第一話　日常×非日常

暑くもなく寒くもない、過ごしやすくはあるが、やる気は全く湧いてこないある春の日。短いようで本当に短い春休みを終え、高等学校最高学年としての一年が始まる日。

あの日のことは今でも鮮明に覚えている、それこそ朝の目覚め方から家族との他愛もない会話の一言一句、通学路の景色、当たり前のように繰り返されてきた日常の一欠片。

これからもきっと忘れることはないだろう。いや、忘れられるわけがない。

その日俺は驚くほど素直な起き方をした、いつもは低血圧とやる気の無さで朝は全然起きられない。携帯電話のアラームは起床時間の一時間前から十回分セットし枕元に、目覚まし時計はベッドから離れた机の上に配置、もちろんそれぞれの音量は最大だ。携帯電話のアラームはいつも知らないうちに止めてしまっている、簡単操作で止められるのが難点なのかもしれない、なので普段は机の上の目覚まし時計に起こされている、止めるためには起き上がらなければならないのでそのまま強制的に起床となるのだ。でもそれでも起きない日もたまにある、そのくらい朝が弱いのだ。

そんな俺が目覚ましの鳴る前に目を覚まし、全てのアラームを解除して起き上がり一階にある居間にまで来ている。

「……あり得ん」

思わず自分でそう呟いていた。

「ふふぁぁぁぁ～」

階段の上から間抜けな声が聞こえてきた、声の主は妹である。

「おなかへっ、ふはぁ？　ほ、ほにぃちゃん？」

意味がわからん、そして俺はいつから「ほにぃちゃん」なんていう名前になったんだ？

まあいい、とりあえずは朝の挨拶か、俺から言うのは初めてなんじゃないか？
「おはよう」
「なんで？」
朝にする挨拶に『おはよう』を選んで疑問を投げかけられたのは生まれて初めてだ。と、考えている間に目の前の霊長類ヒト科目、年齢十四歳、職業女子中学生兼俺の妹は、俺より十センチ以上も低い身長からさらに頭を下げて、俺の顔を見上げるようにしながら質問を続けた。
「何で起きてるの？」
「朝、だから？」
「朝、なのにだよ！　何かあったの？」
「別に何もないよ」
「どこか変なの？　体の具合悪いとか？」
「元気だ、問題なし」
投げかけられる質問に一つずつ答えていく
「絶対変！　何かあった！　おかしい！」
「おいおい」
「彼女出来たとか……」
「へ？」
「彼女と一緒に登校する約束とかしちゃったりしちゃってるんだ」
「こらこら？」
また始まった。
この目の前の我が妹は、たまにこうやって妄想が暴走する。
「彼女という立場を利用し、朝が弱いのを知っていながらお兄ちゃんに早起きを強要しているのね！　そして毎日の早起きで弱っていくお兄ちゃんに……ブツブツブツブツ」
「あの～すいませんマイシスター？　そろそろ現実世界にお帰り願えませんか？」
妄想を続ける我が妹に投げかけてみた。すると妄想少女は俺の両

肩を、その小さな両手でガシッと掴み
「大丈夫！　お兄ちゃんは私が守るから！」
と、ものすごいイケメンスマイルで言い放った、どうやら彼女の中で何か壮大な物語が始まったらしい。女の子、それも妹に守られる兄ってどうよ？
「とりあえず朝ごはん作るから待ってて」
気づけば妹は、何事もなかったかのように台所へと向かっていた。もう俺の早起きの理由とかは興味無いらしい、というか色々と間違った方向で解決したようだ。
なにわともあれ朝ごはんだ、おなかもすいている。

台所で手際良く料理をする妹、それはかなり新鮮な光景だった。いつもは時間ぎりぎりに起きるせいで朝ごはんのできる工程を目にすることはなかった。初めて見る妹の姿に少し感心した。
我が家は訳あって両親がほとんど家にいない、たまにフラリと帰って来たかと思うと、次の日にはもういなかったりする。
そんな家庭なので料理に関わらず、家事の全般は俺と妹で分担している。妹は主に料理と洗濯を、俺は掃除にゴミ出し、後は力仕事やら雑用やらだ。とは言っても力仕事や雑用なんてのはほとんど起きない。普通の生活レベルで、力仕事と呼べるイベントはそうそう起こりはしない、雑用にしたって我が家の万能娘たる妹様がパーフェクトに家事をこなしてしまうから、お目にかかることはほとんどない。最近あったのは確か、いつだったか思い出すのも困難なほど前な気がする。
まぁ、早い話が我が家は妹のおかげで成り立っているのである。
「俺って役立たずぅ」
テンション下がりました。
「ん～？　お兄ちゃん何か言ったぁ？」
「なぁんも言ってないよ、それより俺も何か手伝うよ」
頑張ってみようと思った。

「もうやることないよ～、てゆうかお兄ちゃん料理とかしたことないでしょ～？」
「ははは、そうでした」
テーブルの上に今日の朝食が並べられる、ご飯に味噌汁、焼き鮭と卵焼き、ほうれん草のゴマ和え。
「はい、お兄ちゃんのお仕事は私の料理を美味しく食べきることですよ」
我が妹ながら将来いいお嫁さんになるだろうと思いながら美味しく完食した。
せっかく早起きだったので妹と一緒に家を出ることにした。言い出したのは妹だ、まさか彼女がどうとかっての本気で考えていないよな？
通学路は途中から別々になる、そこからは二人とも、学校まではそれほどの距離でもないのだが、やはり少し気になってはいたようで、別れ際に「やっぱり今日のお兄ちゃん変なんだから色々と気を付けてね？」と言われた。
「善処しまっす」と適当に返事をして一人学校への道を歩く……歩く。
歩く。
歩く。
「あ、れ？」
そういえば歩いてこの道を通うのは初めてだった。いつもギリギリの全力疾走だから、こうやってゆっくりと景色を眺めながら歩くのは不思議な感じがする。
家から学校までは徒歩で十分程、最短距離を行けば右折二回、左折四回、上り坂少々といったところか。途中にはコンビニが一件と神社があるくらいだ。
「神社……か」
昔は良くここの神社を遊び場にしてたなぁ。神をも恐れぬ行為だな、普通は怒られるぞ？　とは言ってもこの神社、石段を二十段ほ

ど上った高台に位置しているのだが、その敷地はかなり広い、隅っこで遊ぶくらいならどうってことはない、神主のおっさんもたまに一緒に遊んでくれたくらいだ。

……働けよ。

そういえばこの神社、まっすぐ裏側に抜けたら学校の真横あたりに出なかったっけ？　校舎から鳥居が見えるくらいだから合っているはず。

時間にも余裕がある、抜けられなくても昔の遊び場をちょっと覗くのもいいかもしれない。それに早起きするなんて今日に限った事だろうし、今後のために近道探しはできる限りしておいた方がお得だ。

もう明日からは早起きしない気満々である。

「いよっと！」

頂上間近ではあるがさすがに二十段はなかなかの強敵だ、たとえ抜け道があったとしてもこの石段を朝から登りきる自信はあまりない。こうして見下ろすと良く分かる。

「結構高いな」

高所恐怖症じゃなくて良かったよ。

ふう、と呼吸を整え前に向き直り、残りの数段を一気に駆け上がる。

「いやったぁぁぁぁ！」

何となく喜びの声を上げてみた、いや、確かにそれくらいの達成感は得られた。

が、それが場違いな、全くもって場違いな行為であることに俺は気づいた。

いや、気づかれてしまった。

石段を登りきった先、神社の前には数人の怪しげな人達がいた。怪しげ、全員が黒いマントのようなものを着ていた、フードも付いていて全員が深く、顔も見えないほど深くかぶっていた。

俺は完全に固まってしまっていた、人がいるとは思っていなかった、いたとしても神主のおっさんくらいだろうと、そう思っていた。だが、実際は違っていた、数人の怪しい集団、それも怪しいにも程がある、現代のこの日本でこんな集団に会うのってどのくらいの確立だろう、ていうかその素敵なマントはどこに売っているのですか？　メイドインどこですか？

そんなことを考えて固まっている間、あちらさんもその場から動かずこちらをずっと見ていた。

このままはさすがにマズそうだ、俺は何事もなかったかのように、当初の目的だった神社の裏手へと足を進めた、あからさまに逃げ出したら逆にまずいと思ったのだ。

するとさっきまで動かずを保っていた黒マントの集団が、俺の動きに合わせて移動を始めた。

「あ、いやいや、おきになさらずにぃ」

全部平仮名みたいな言い方になってしまった、正確には人数は六人、全員男性だろうか、割と体格がいいように見えたが、良く見ると一人だけマントのデザインが違う、体つきも小柄だ、女性かもしれない。ちょうど集団の中心にいて一番雰囲気が出ている感じだ、この集団のトップだろうか、本当に何の集団だよ。

俺は神社の左脇を抜けて裏手へ行こうとしていたのだが、どうやら行ってはダメらしい。じりじりと囲むように近寄ってくる、逃げ道は先に塞がれていた、石段にはもう戻れなさそうだ。

やっっば。

怪しすぎる、ヤバすぎる、わけわかんないだろ、この人たちは俺を追いこんでどうするつもりだ？　ヤバい予感しかしない、俺の体と思考は意外と早く危険に対して反応していた、神社の裏手への道がまだ開いている、そこに向かって走り出していた。黒マント達もそれに反応して俺の後を追ってくる、予想通りだった。

この黒マント達はさっきから統一された動きしかしていない、当然俺が逃げればその後を追ってくる、俺は裏手へは向かわず神社を

時計回りに迂回した。下手に裏手に向かってもそのまま学校に抜けられる保証はなかったからだ、神社の裏を、側面を、黒マントから逃げながら走る、幸い黒マント達の足はそれほど速くない、このまま逃げ切れるかもしれない。
後は神社の正面へと戻って石段を一気に下りて近くのコンビニに逃げ込む！
が、そう上手くもいかなかった、俺の行く手を阻んだのは黒マントだった、デザインの少し違う黒マント。
やられた。
統一された動きだと思っていたあれは、本当は統率された動きだったのか、初めからこうなることも予想していて一人残っていたと。
俺は不用意に黒マントに接触してしまうのはマズいと思い、直前で急ブレーキをかける、マントの中の手に凶器でも握っていたら、それこそマズイ。
トップスピードをいきなりゼロにはできない、前に進むために動かしていた足を止め地に力を入れる、態勢を低くしどんな事態にも対応できるように備えた、砂利交じりの地面と靴の裏とを激しく摩擦させながら、砂埃を上げようやくの停止、だが近すぎる、すぐに正面の黒マントに目をやる、遅れてきた風でマントが揺れる、中が少しだけ窺える。
そこに見えたのは凶器を握った手なんかではなかった
「うちの、制服……？」
それはまぎれもなく俺の通う高校の制服だった。予想通り女子のもの、スカート短め。姿勢を低くしていたので、俺の視線は腰よりも下の位置にあった。
ナイス太もも。
いや、そんな場合じゃない。
「ちっ」
目の前の黒マント、もといナイス太ももの彼女から舌打ちが聞こえた、制服を見られたのがマズかったのか？

突然の事で訳が分からなくなっていたが、制服を確認できたことで俺の中に少し落ち着きができた、相手は得体のしれない黒マントではなく、同じ高校に通う同年代とわかったからだろう、もしかしたら話が通じるかもと、話せば分かるかもと。

「お前、うちの学校の」

言いかけた刹那、背中に衝撃が走る、気づくと背後から刀の切っ先のようなものが目の前の黒マントに向けられていた、刃は全部で四本、日本刀のようなものから西洋刀、サーベルやレイピアのようなものまで、全部漫画やアニメでしか見たことのないものだ。

いったい何が？　追ってきていた黒マントか？　でもおかしいだろ、その刃を俺に向けるならまだしも、同じ黒マントの仲間に向けるなんて。恐る恐る後ろを振り向こうとするがなぜか真横以上に視界が行かない。何かに体がつっかえているような感覚、突如胸のあたりに激痛が走る。刃は俺の体を見事に貫通して彼女に向けられていたのだ。

ああ、そういうことか、どうりで。

「ごふっ」

これまた漫画やアニメでしか聞いたことのないような音が出る、俺の口から。音と一緒に大量の血を吐いた。

「嘘……だ……ろ？」

何の躊躇もなく、俺を追っていた黒マント達は俺に追い付き、その勢いのままその刃で貫いた。

普通こんなあからさまな武器持って歩くかよ。銃刀法とかどうしたよ、ただでさえ怪しすぎる黒マントなんだから職務質問とかしておこうよ。

ああ、死ぬときって意外と冷静なんだなぁ。警察とか法律とかにツッコミ入れられるなんて余裕じゃないか、俺。

次の瞬間俺の視界が跳ね上がった、垂直にまっすぐ上に、そしてゆっくりと縦回転を始める、青空を通り過ぎ視界が一回転する前に俺は状況を把握した、刺さった刃は四本、追っては五人。最後の一

人は俺の首を横薙ぎに撥ねたのだ。
「こんな死に方ありかよ」
視界はゆっくりと回る。
真下には血の雨が降る。
黒マントは赤黒く染まる。
三百六十度、視界が一回転したところで映像は途切れた。

暑くもなく寒くもない、過ごしやすくはあるが、やる気は全く湧いてこないある春の日。短いようで本当に短い春休みを終え、高等学校最高学年としての一年が始まる日。
この日のことは今でも鮮明に覚えている、それこそ朝の目覚め方から家族との他愛もない会話の一言一句、通学路の景色、当たり前のように繰り返されてきた日常の一欠片。
これからもきっと忘れることはないだろう。いや、忘れられるわけがない。

四月十日。

俺は、

死んだ。

第二話　日常×遭遇

ある春の晴れた日、俺は死んだ。

……はずだった。

今俺は自分の部屋のベッドの上にいる。

首を触ってみる、つながっている、傷も痛みも違和感もない。

「……そうか、夢オチだな？」

一瞬戸惑いはしたが、妙に頭は冴えていて、やけに冷静でいられた。夢にもいろいろあるがその大抵は現実離れしたものが多い気がする、空を飛んだり、不思議な力を使えたり、今回のは夢にしてはリアルすぎだった気もするが。

日付を確認する、視線を移した先、携帯電話の画面にははっきりと四月十日の表示、

「うん、夢オチだ」

再確認。大事なこと。

起き上がり、居間に降りるがそこには誰もいなかった。

「ん、あれ？　そういや今何時だ？」

日付ばかりに意識がいっていて時間を確認していなかった、居間の壁にかかっている時計に目をやる、朝の六時半を少し回ったところだった。

「早起きすぎだろ」

まあ、今日は変な夢をみたせいだろうが、普段まったく起きられない自分からしたら驚くべきことである。妹が知ったらまた変な疑いをかけられてしまいそうだ。

「……あん？　また？」

記憶が混乱しているのか、いろいろと混ざってしまっているようだ、それともただ寝ぼけているだけなのか。

そうして居間の入り口で突っ立ったまま考えていると、後ろから階段を下りる音が聞こえてくる。音の主はもちろん妹だ。
「ふぁぁぁぁぁ、おなかへっ……ほにいちゃん？」
眠いんだか、空腹なんだかどっちなんだよ。寝起きの妹、普段朝が全くダメな俺には初めて見る状態の妹だ。夢以外では。
それにしても「ほにいちゃん」とは、デジャブにも程がある。
「おはよう、いつもこんな時間に起きてたのか？」
妹は未だに状況を飲み込めていないらしい。
目を見開いて俺の顔を驚きながら見つつ、首だけを縦に動かし頷いてみせた。
「そうか、早起きだな、俺には絶対無理だよ」
そう言って俺は居間のソファーに腰掛ける、ここでようやく思考が追いついたらしい。
「お兄ちゃんどうしたの？　私より早起きなんて、もしかして徹夜？」
「いや、たまたまだよ」
「たまたま？　うーん、アヤシイ」
なぜか疑われている、確かにいつもなら放っておいたらいつまでも寝続けるような人間が、自分より早く起きているのだから無理もない。
「彼女だ……」
急に声のトーンを下げて話しだす妹。
「彼女ができたんだ、朝早めに待ち合わせて一緒に登校するんだ、そして誰もいない教室とかで楽しくおしゃべり……」
「ないないないないない！　バカかお前は！」
いきなりどういう妄想だよ、というか暴走か。
「だって、絶対おかしいもん」
「だからってなんで彼女だよ」
「お兄ちゃんも年頃だし、妹としては可愛い彼女の一人や二人いてくれた方が、嬉しいような、悲しいような？」

「なんで悲しいんだよ、それに彼女が二人もいてたまるか、お前は兄にどんな修羅場を期待してるんだよ！」
「じゃあ一人ならいるんだ？」
「いない！　生まれてこのかたいたためしもない！」
あ、なんか涙出ちゃいそう。
「だよねえ、お兄ちゃんがあーちゃん以外の女の子と話してるの見たことないもん」
あーちゃん、近所に住む幼馴染である。
木野木　朱里（このぎ　あかり）妹は朱里のことを今も、あーちゃんと呼んでいる、昔は俺もそう呼んでいたからたまに呼びそうになる。この前間違えて呼んだら顔を真っ赤にして逃げて行ったっけ。
子供のころに身についた癖ってなかなか変えられないものだな。
それはさておき。
「とにかく、今日の早起きは本当にたまたまだよ、俺だって驚いたんだから」
「世の中珍しいこともあるもんだね、じゃあ今日はお兄ちゃんと一緒に学校に行けるね」
「途中までだけどな」
じゃあご飯の用意するね、と妹は台所へ。俺は出来上がるまでの間に朝の身支度と忘れていた目覚ましの解除を済ませた。
何やらごく最近同じような朝のメニューを食べた気はしたが、そんな既視感は隅に置いて久々にゆっくりできる朝食を堪能した。

「忘れ物は？」
「ないよ～」
「じゃあ行くか」
家から学校まではそう遠くはない。その道のりの半分程のところで妹とは別れることになる。こうして妹と二人で登校なんていつ位ぶりだろう？　道中他愛もない話をしながら歩いた、いつもは遅刻ギリギリで走って通っている道だが、のんびりと歩くのもなかなか

いいものだ。
「いい天気だねえ、お兄ちゃん？」
「ああ、昼寝にはもってこいだ」
「お兄ちゃん……」
じとーっとした目で見られた。もうすぐそこに迫っている十字路で通学路は別れる、ここは適当にあしらって逃げるとしよう。
「ははは～、冗談冗談。べ、勉強日和だなぁぁ」
そう言って視線をわざとらしく外す。その時だった。
移動する視界の中で、俺の双眸はあるものを捕えそこから離せなくなった。
前方を歩く一人の女の子、同じ高校の制服。一見それはただの登校風景だが、俺は、俺の全身はそんな風景には捉えていなかった。
首がチリチリと痛む、夢のあの映像が早送りで流れだす。
「あれは」
あの女の子は、あの時の、デザインの少し違う黒マントの……。
いや、違う、そんなはずない、あれは夢のはずだ、夢じゃなきゃおかしいだろ。
頭では否定を繰り返すが、映像が、記憶が、何よりも身体が反応してしまっている。

アレハゲンジツダ。

現実のわけはない、その証拠に俺は今生きている。それに今日は四月十日だ、間違いない。
それに俺はあの時、マントの中の服装と、身体の一部しか見ていない、ナイス太ももだった以外特徴があったわけじゃない、制服だって個人差があるわけじゃない、あれはそういう服だ。
それなのにこの感じはなんだ？　身体が、自分のものじゃないみたいになっている、心臓の鼓動が大きく響く、まるで身体全体が心臓になってしまったかのように一つ一つの鼓動が大きく響く。

「お兄ちゃん？　どうしたの？　急に止まっちゃって」
妹にそう言われて初めて自分の足が止まっていることに気がついた、鼓動はなおも響き続ける、もうこのまま見なかったことになんてできない、俺は、確かめなくちゃいけない。間違いならそれでいい、あれはやっぱり夢で、俺が少し気にしすぎているだけ、それだけのことだ。
でも、もし、間違いじゃなかったとしたら？　あれが現実に起きたことなんだとしたら……。
それはその時に考えよう、今はもう何も考えられそうにない、あの子に追いつこう、全てはそれからだ。
「ねえ、お兄ちゃんどうしちゃったの？　何かあったの？」
そう言って妹も俺の視線に方向を合わせる、当然俺が何を見て固まっていたかがすぐにわかる。
「……お兄ちゃん、やっぱり彼女が……」
「ごめん、ちょっと急ぎの用が出来た、先に行くよ」
「お、お兄ちゃんのバカァァァァ！」
妹の妄想暴走がまた始まりそうだが、言い訳やら説明は帰ってからにしよう、今はあの子に追いつかなくちゃ。距離的にはそれほど離れてはいない、走ればすぐに追いつける、追いついて、追いついて？追いついてどうしたらいいんだ？　何も考えていなかった、真実を確かめる方法を何も。
俺はバカか！　ほんとに無計画だ、そして無鉄砲。大体に、もしあれが夢じゃないのだとしたら、このままあの子に不用意に近づく方がまずいんじゃないのか？　でもって、気付くの遅すぎだ！！
ちょうど元々いた位置からここまでが緩い下り坂だったのが効いた、思いとどまって急ブレーキを自分の足に命令したころには加速もなかなかで、目標の彼女自身ものんびりとした足取りだったらしく距離も意外なほどに縮まっていて、ちょうどあの時のような状態になってしまっていた。
彼女も背後からの異様な気配に気づいたらしくこちらを振り返っ

ていた、急停止の勢いを殺しきれず少し前方につんのめってしまった、少し遅れて後ろから風が吹く、あの時のようにその風でスカートが揺れる、どころかマントがない分割と普通にめくれてる、なんというか。

ごちそうさまです。ナイスホワイト、ナイス太もも！

「あなた、変態？」

変態、確かにそうだ、女子高生目がけてダッシュして、その風圧でスカートめくってりゃあ、そいつはもう変態以外の何者でもない。

「い、いやぁすいません、つい勢いで」

俺はつんのめった態勢のまま、彼女の顔を見上げるような格好で苦しすぎる言い訳を放った。

彼女は腕組みをして俺を見下ろす、もとい、見下すようにしている。良く見るとなかなか結構な美人である、ゆえに、見下されるとかなり迫力が、圧力がある。

「そんな大胆にスカートの中覗こうとする人、初めて見たわ」

「いや、これには訳がありまして」

「……聞きましょう」

蛇ににらまれた蛙の気分だ、だけどこうやって向かい合っても特になんの反応もなし、ということはやはりあれは夢だったってことか。さすがに考えすぎか、どうかしてるな、俺。あとはどうやってこの場を乗り切るか。

「実はちょっと、知り合いに似ていたもので、後ろから驚かせてやろうと思っていたんですけど……」

「人違いだったと？」

「その通りで」

少しの沈黙。

怒っていますか？　怒っていますよね？　当然ですよねぇ。とりあえずここは土下座の一発でもかますか？

「ふふ」

彼女の口から笑みがこぼれる。

「意外と姑息な手を使うのね？」
「え？　はい？」
「意外と臆病なのかしら？」
何のことなんだ？　もしかして相当怒ってらっしゃる？　さては土下座作戦も見透かされているのか、こうなれば最後の手段だ。
「すいません、不可抗力とは言え嫌な思いをさせてしまったようで。俺に出来る事だったら何でもしますんで、許してもらえませんか？」
「あら、それはいい心掛けね、でもその前に一つ質問してもいいかしら？」
「あ、はい、なんですか？」
「○◇●△■▽☆？」
「！！」
衝撃の質問だった、それはあの悪夢は現実なのだと、実際に起きていたことなのだと知るに十分過ぎる一撃、さっきまで落ち着きを取り戻していた身体を、精神を一気に揺さぶられた。あれが真実だとしたら、俺は、俺は、もう。
記憶と思考の波が一気に押し寄せる、その波はそのまま俺の意識を根こそぎ持っていった。
暗転していく視界の中で、彼女の不敵な笑みとあの質問だけが響き続けていた。
「もう首は痛くない？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7854i/

ういるす×ういるす

2010年10月22日00時01分発行